

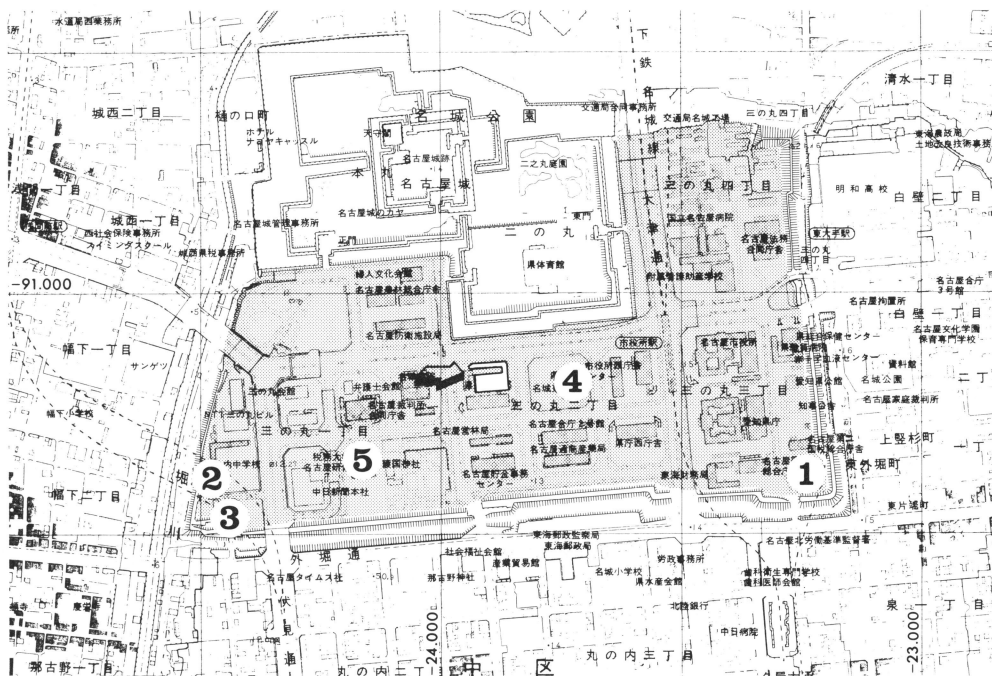
なごや じょう さん まる 名古屋城三の丸遺跡

調査の経過

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋市中区三の丸地内に所在する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。これまでに、第1図の5地点で発掘調査が実施された。平成3年度の調査は、愛知県警察本部内の、総合科学センター建設予定地3,600㎡で実施された。調査の結果、上下2面にわたる遺構が検出され、下面では戦国期の那古野城の一画が、上面では近世尾張藩における上級家臣の武家屋敷地が確認された。

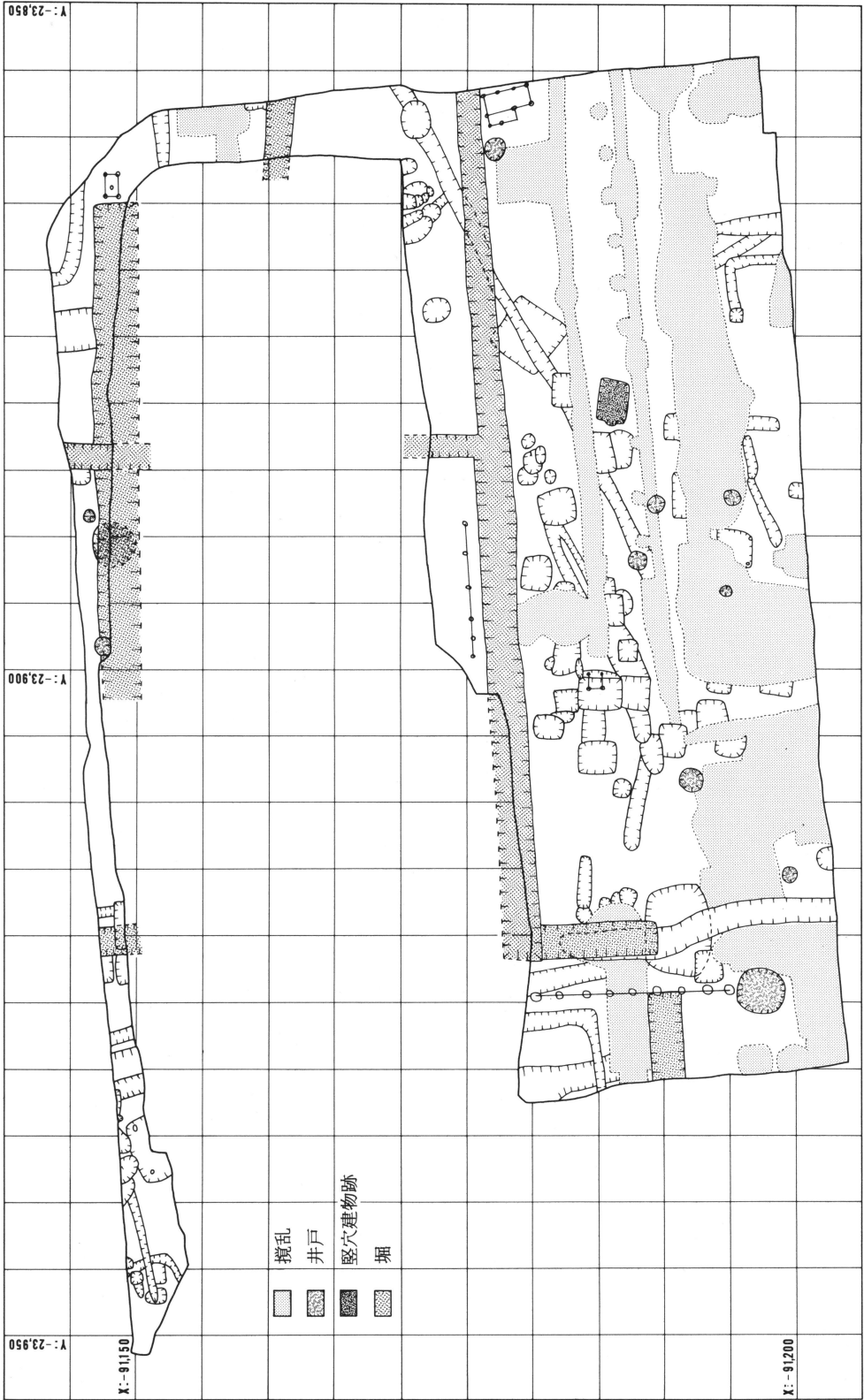
戦国時代の遺構

戦国時代の主な遺構としては、堀・柵列・井戸・方形竪穴建物跡などがある。縦横に走る堀は全部で6条あり、大きいものでは幅4m・深さ3.5m、小さいものでも幅2.5m・深さ2mを測る。いずれも断面形が鋭いV字状を呈する薬研堀で、堀際には土塁を伴っていたと考えられる。このような堀と土塁の配置構成や出土遺物などの検討から、これらは名古屋城二の丸にあったとされる、織田信秀・信長父子が居城した那古野城の一画を構成する郭群と考えることができる。また、円筒状に掘り込まれた桶組み井戸や、貯蔵庫か台所と思われる焼失した方形竪穴建物跡も確認され、注目された。(驚見 豊)



①名古屋市公館地点 (87・88) ②丸の内中学校地点 (87) ③県図書館地点 (88) ④名古屋第一地方合同庁舎地点 (88) ⑤簡易・家庭裁判所地点 (90) □は三の丸遺跡の範囲 () 内は調査西暦年

第1図 三の丸遺跡と今回の調査地点 (矢印)



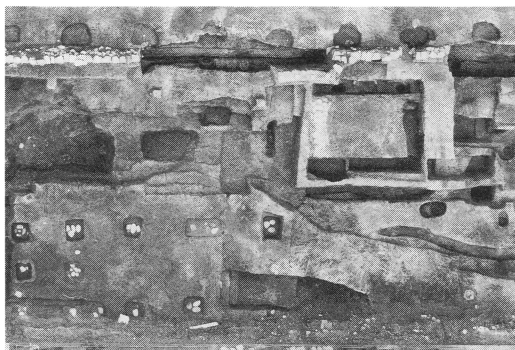
第2図 戦国時代の遺構略測図

江戸時代の遺構・遺物

今回の調査区は、尾張藩上級武士の屋敷地であり、調査によって屋敷境A～Cが検出された。屋敷境Aは、17世紀半ばに家老の竹腰氏が屋敷を構える以前に、この土地を東西に分けていた境界施設で簡単な柵列である。屋敷境Bは、竹腰氏の屋敷地の南境と考えられるが、簡単な柵列から堀と溝、さらに支柱をもち一部には石積み基礎をもつ瓦葺きの土堀へと変化したと思われる。屋敷境Cは、家老職級の家臣山澄氏の屋敷地と、幕末には熊谷氏が拝領していた屋敷地の境で、深く箱掘りされた溝である。これらの屋敷境の構造とその変化は、江戸時代の武家屋敷での境界に対する意識を考察する資料となろう。また屋敷境周辺から発見された井戸・廃棄土坑・建物跡などは、屋敷内の土地利用の有りかたを考える手掛かりを与えた。

遺物は、陶磁器・瓦類を中心にコンテナ1,000箱以上が出土した。中でも、三ツ葉葵の一部をかたどった金箔、漆器にほどこされた美しい蒔絵細工、家紋の入った瓦などは、膨大な量の陶磁器類とあわせて、江戸時代に三の丸に居住していた上級武士の暮らしぶりや経済力を伝えるものである。

(余合昭彦)

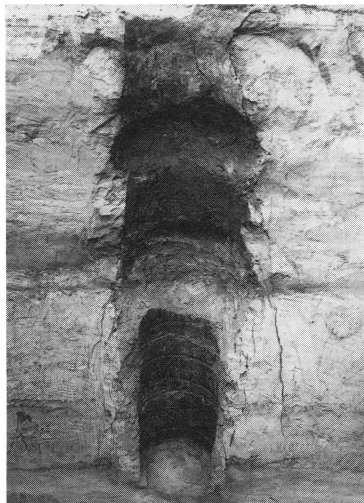


屋敷境の石組基礎と溝→



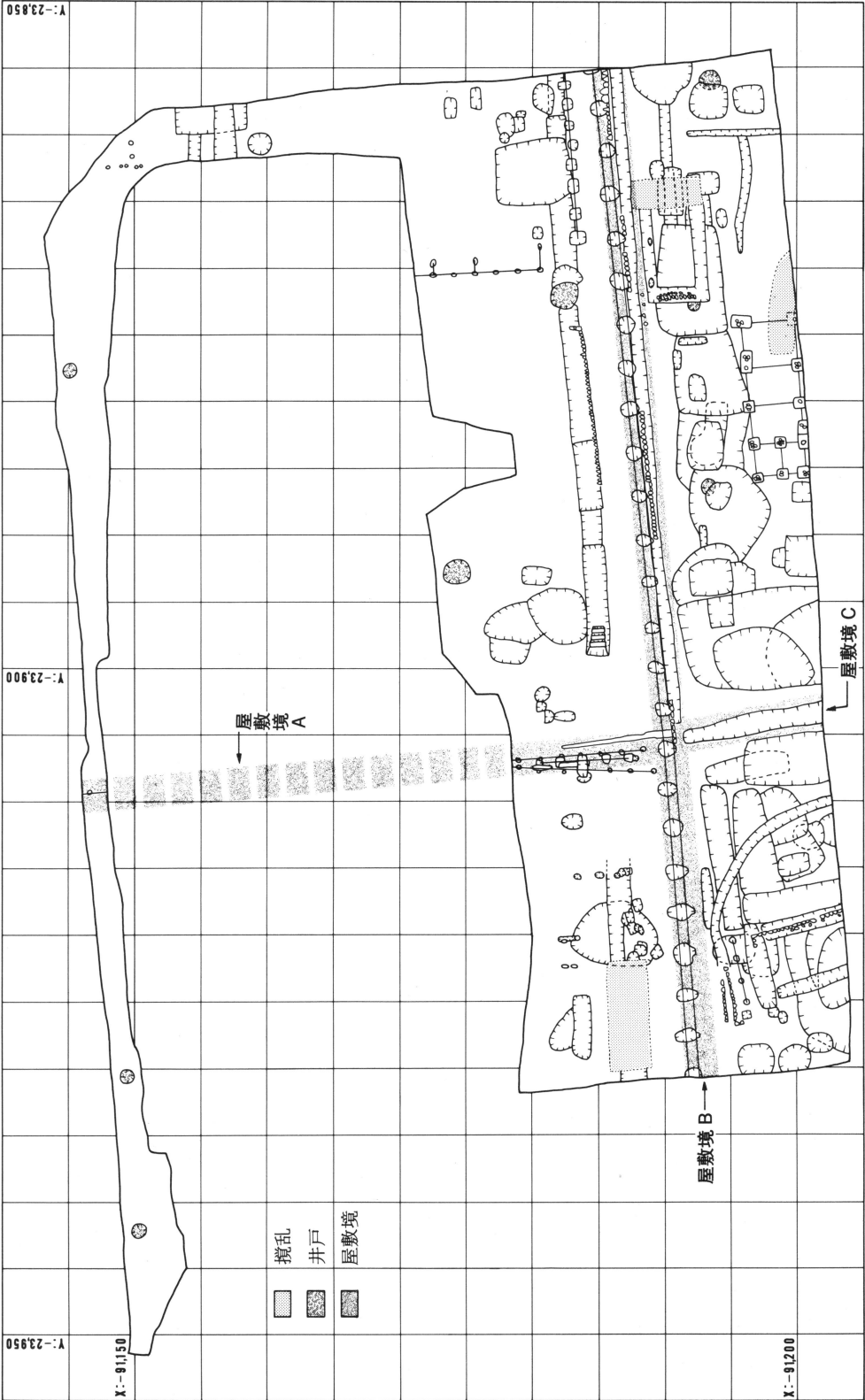
↑
瓦葺き建物及び
土蔵の基礎

方形竪穴建物跡
↓



戦国時代の
桶組み井戸←





第 3 図 江戸時代遺構略測図